

周辺からの記憶

2. 震災半年後の東北へ

村本邦子（立命館大学）

2014年2月18日、東日本大震災シンポジウム「災害後コミュニティのレジリエンスを引き出す支援とは」を開催した。被災地の支援者たちを招き、震災から3年を振り返って、どの時期にどのような支援が求められたのか、それに対して、外からやってきた支援がどのように役立ったのか、役立たなかったのか、今後のニーズはどう変化していくのかなどについて語ってもらった。ゲストは、ハーティ仙台の八幡悦子さん、ビーンズふくしまの中鉢博之さん、子どものエンパワメントいわての山本克彦さん、いわてGINGA-NETの八重樫綾子さん、臨床心理士の河野暁子さん、きょうとNPOセンターの野池雅人さん。詳細はまた別の形で報告するが、それぞれに異なる視点から、異なる地点において時間経過とともに実践の形が変化してきた様子がわかり、重層的で興味深い話題提供だったと思う。

とくに印象的だったことは、阪神淡路大震災やその他の被災・被害体験が原体験としてあって、そこから東日本大震災への向かい方が生まれてきたということである。今回の体験は、またそれぞれの原体験となって、来るべき未来の災害への向かい方へとつながっていくのだろう。過去から学ぶとよく言うが、私たちのプロジェクトが院生たちを巻き込む形で展開してきたことを良かったと思う。しっかり現在から学び、未来につなげて欲しい。もちろん私たち自身もだ。福島の中鉢さんから、証人としての価値は十年経って初めて少しわかるのかもしれないと言われたが、まったくもつともだ。今回は、私が経験した震災半年後の東北について記述する。

2011年9月 旅支度

7月2日、応用人間科学研究科の十周年記念シンポジウム「東日本大震災と大学の役割～応用人間科学研究科に期待されるこ

と」を企画した (<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/10shunen2.html>)。中村正さんの基調講演「応用人間科学研究科がめざしてきたもの～対人援助学の創造とその可能性」(<http://www.ritsumei.ac.jp/acd/gr/gsshs/10shunen/10shunen%20Professor%20Nakamura%20speech.pdf>) に続き、きょうと NPO センターの深尾昌峰さんが「東日本大震災とボランティア活動に期待されること」、徳田完二先生が「東日本大震災とボランティア活動に期待されること」、藤信子先生が「東日本大震災と対人援助職に期待されること～災害支援者のためのグループから考える」の話題提供を行い、佐藤敬二先生（学生部長）と荒木穂積先生（研究科長）がコメントをした。東日本大震災から3ヶ月の学生と教員の動きが紹介されるとともに、もっと根源的な、ボランティアとは何か、市民性と専門性、復興と新しい社会システムの構築へ向けた視点などが提示された。それらを繋ぐものとして、応用人間科学研究科と対人援助学がある。深尾さんは「東北から日本を変える」と言った。研究科が次の十年、このプロジェクトを抱えていくことには意味があるだろう。

8月は中国蘇州へ行き、屋久島へ行ったが、意図せず、このふたつの体験は、私にとって東北のコミュニティへ入るための一種のイニシエーションとなった。それはつまり、人々が互いに頼り合うなかでしか物事が回っていかないコミュニティのあり方について納得するということである。たとえば、どこかへ行きたいと思っても、誰かが車を出してくれない限り動けない。人とつながっていれば、情報は口伝えであつと

いう間に届いてくるが、自分を閉ざしていれば、何もわからないし、何もできない。やりたいこと、したいことを主体的に明確に持っているのはストレスが溜まるばかりで、むしろ、ぼんやりと、ああだったらいいなあ、こうだったらいいかもなあと思いつつ、時をやり過ごして、チャンスがあれば実現するもよし、しないもよし・・・という存在の仕方が適しているのである。ついでながら、9月初めはローマへ行き、石畳のアッピア街道をヒタヒタ限りなく歩き、カタコンベや骸骨寺を見て、歴史と文化の奥行にあらためて謙虚な気持ちになった。欲望の塊としての我が身には一種の禊のような旅だった。

震災半年後、初めて向かう東北はどんな様子だろうか。7月半ば、東京へ行った時、大阪と比べて暗いことに驚いた。節電のために街全体が文字通り暗いのだ。4月、鳴門へ渡るトンネルが節電で真っ暗だったことはあるが、関西に暮らしていると、節電はあっても日常に差し障るほどではない。東と西とではずいぶん空気が違う。少し緊張しながら、東京、宮城、岩手、青森と北上する旅に出る。最終目的地はプロジェクト開催地むつだが、道中、プロジェクト立ち上げのパートナーである平田さなえさんと一緒に、フィールドワークを兼ね、プロジェクトの協力者や協働機関を探して営業するのだ。

2011年9月19日
東京、

国境なき医師団

まずは、東京駅で下車して、古くからの友人で、国境なき医師団 (<http://www.msfor.jp/>) に所属する河野暁子さん（臨床心理士）と落合い、11月に予定しているシンポジウムの打ち合わせを兼ねた情報交換。国境なき医師団については耳にしたことがあると思うが、1971年にフランスで設立された NGO で、ボスニア、ソマリアなどの紛争地、中国四川、ハイチなど自然災害の被災地でも緊急医療援助活動を行ってきた。世界に28の事務局があり、1992年には日本事務局が発足している。東日本大震災でも、発生の翌日、3月12日から医師や看護師を含む医療チームと臨床心理士で構成された心理ケアのチームが連携し、援助の届きにくい孤立被災地や避難所を移動診療しながら、高齢者や子どもなど弱い立場に置かれた人びとへの診療、医薬品・救援物資の配布などを行った。

河野さんは、国境なき医師団の心理士として、2006年からパレスチナやイエメンに派遣された経験を持つが、帰国中に震災が起これ、現地受け入れ窓口となった。医師団は定型メニューを持っており、窓口を中心に、現地の心理士を要請し、海外から心のケアチームを通訳とともに入れて、コーピングを強化する一時介入等を行う。しかし、今回は、外国人チームが通訳とともに入ることに対する現地からの抵抗が強く、現地のニーズに合わせ、現地のシステムの中に入って活動することが求められた。河野さんのこれまでの活動先では、外国人が支援に来たことで安心する様子が見られ、

パレスチナでは、彼らの置かれた状況を世界に知って欲しいと国際 NGO は歓迎されたし、イエメンでも、アフリカから逃げてきた難民は、外国人である自分たちを見て、ここは安全だとわかったと言ったという。たしかに、外国人の意味は状況によってずいぶん違うだろう。

宮古市田老では現地の医療機関や保健師と一緒に活動し、南三陸ではカフェという形で人々と話をしたり、子どもと工作したりしたそう。支援する側がアウトリーチするのと、相談室でクライアントとお会いするのでは全く違う。カウンセリング、心のケアというのは災害現場で支援に入る時、とても使いにくい言葉だったという。前号に書いたが、これは阪神淡路大震災の私自身の体験と合致する。あれから15年以上経ってカウンセリングがこれほど一般的になってきえそうなのだ。ケアは、非日常にではなく、日常のなかに組み込まれるべきだと思う。国境なき医師団が行うのは緊急支援なので、河野さんはしばらく医師団を離れ、東北に住んで支援を続けるそう。11月の再会を約束して別れる。

2011年9月20日 仙台

宮城でのプロジェクト開催可能性を探るため、東北新幹線で仙台まで出て1泊し、翌朝から営業回りに出る。これまで20年以上、女性ライフサイクル研究所で事業展開してきたが、営業というようなことは無

縁だった。ただ縁をつなぎながらニーズに応え、楽しく仕事を引き受けてきただけだったが、ボランティアとなると売り込みが必要になるなんて、何だか皮肉な感じもする。ニーズがこちらにあるのだから仕方ないか。もともとこの手のことは好きではない。自分の思いを熱く語ることはできるし、それが結果的に他者にアピールすることはあっても、何かを売り込むというような目的を持った出会いがそもそも嫌いなのだ。営業というツールを介したフィールドワークと捉えることにする。

最初は、人のついでアポを入れてあった「せんだいメディアテーク」(<http://www.sendai-media-tek.jp/>)を訪ねる。メディアテークは、仙台駅前からまっすぐ延びた定禅寺通り沿いにある仙台市の複合文化施設で、全面ガラス張り、支柱のスケルトン構造が外から見え、中からは街路樹が見える。きわめて現代的、いや未来的と言った方が良いかもしれない。設計中に阪神大震災が起きたことから、数百年に一度の大震災を想定して作られ、震度6強の揺れに耐え、被害は最上階の天井や1・3階の一部のガラス、太陽光設備などに留まったことで話題になった。それでも被害額は130億を越えるという。5月3日より活動再開し、1階のオープンスクエアで交流広場や関連イベントを行っていた。

企画・活動支援室室長の甲斐賢治さんと話したが、こちらのアイデアを伝えると、「支援の棲み分けがあり、メディアテークはフィルムやアート系、どちらかと言えば、もう少し小さな女性団体や子育て支援機関などが適切なのではないか」とのことだった。アートや舞台関係の施設では機能するところが限られており、どこも施設が満杯

状態だという。会場だけでも借りることはできないかと予約を見てもらったが、今年度はすでに満杯、来年度さえわずかな空きがあるだけだった。

お昼を食べるところを探して三越に入ると、「せんだい男女共同参画財団エル・パーク仙台」(<http://www.sendai-l.jp/>)の看板を見かけたので、立ち寄ってみることにする。まずはこちらの趣旨を説明し、女性の状況について尋ねてみるが、「女性の問題はあまり上がってこない。DV相談もあるにはあるが、避難所では声も挙げにくく、仮設に入ってからだんだん増えるのではないか。行政に比べ、民間の方がアクティブである」との話だった。企画は駅前にある「エル・ソーラ仙台」が担当しているということで、電話でつなげてもらったが、やはり企画がすでにいっぱい、共催は難しいとのこと。

次に、「仙台市市民活動サポートセンター」(<http://www.sapo-sen.jp/>)へ行ってみる。「さまざまな団体がマッチングして活動しており、ここにはたくさんのニュースが集まってくる。ターゲットをピンポイントで特定してもらえると考えやすい。これまでないような内容かもしれない」と首を傾げられた。仙台市にこだわらないならニーズのあるところもあるかもしれないとのことで、今後も情報交換させてもらうことにする。

8月の段階で、児童館や市民センター等にもアクセスし、復興支援ということで多くの団体が押し寄せ大変なのだとは聞いていたが、実際、仙台は当面イベントラッシュで、会場はどこも満杯状態である。仙台はアクセスが良いため、関東から多くの企

画が持ち込まれ、イベントチラシや関連ニュースを見ても、ありとあらゆるイベントが予定されているような状態だった。本音は有難迷惑というところだろう。

9月20日 宮城明泉学園

午後は、仙台駅から地下鉄で20分ほどのところにある宮城明泉学園 (<http://www.meysen.ac.jp/top.htm>) を訪れる。震災直後から活発な支援活動を展開していたキリスト教系の幼稚園である。団遊さんの紹介で6月より連絡を取っていた副園長、武浪忠さんに話を聴く。この園は、45年前、日本に伝道をとというマッカーサーの政策でやってきたアメリカ人宣教師2人が、組織の思惑によって制限されるような働き方に満足できなくなり、自分たちの子どもの教育も考え、学校を創ろうと安い丘を買ったところから始まった。70名の園児でスタートし、11年目には大きな住宅地ができて2校目がスタート。英語教育を行い、通園バスを走らせ、地域のコミュニティセンター的な役割を果たすようになった。現在700名ほどの園児がいる。

仙台は東西に広いので、内陸部であるこのあたりは被害が小さく、現在はほとんど通常の生活に戻っている。保護者の中には失業や経営悪化があり、それがどれくらいのものなのか把握できていないし、身近な問題としては、原発による放射線量がどれくらいになっているのか、給食などに使用

している材料がどこの産地なのかという問い合わせもあり、新年度の園児募集に向けての対応がある。沿岸部では被害が大きく、犠牲者もたくさん出たので、幼稚園間のお話を聞くと、大人が無事で子どもが亡くなった例も少なくなく、「なぜ」「その場にいたかった」と悩む大人の話がたくさんあって、これからそういう層に何らかの支援が必要かもしれないと思うと言う。

震災直後、校友より世界飢餓基金が受け入れ先を探していると打診があった。アメリカのジャンボ機で運ばれてきた支援物資が横須賀基地経由で入ってきたので、これも校友の運送会社からトラックや倉庫を提供してもらって物資を受け入れ始めた。日本国際飢餓対策機構 (<http://www.jifh.org/>)、CRASH JAPAN (<http://crashjapan.com/~crashwp/?lang=ja>)、サマリタンズ・パース (<http://www.samaritanspurse.jp/>) の3団体と協力した。サマリタンズ・パースは国際的な災害支援団体で、スマトラ地震やハイチ地震でも民間団体としていち早く現地に入って支援をした実績がある。常に災害用支援物資を世界数か所に保管しており、災害が発生すると災害場所から一番近い倉庫の物資を現地に届けるシステムになっているのだそうだ。今回は、震災3日後でチャーター便に物資を積み、米軍の協力を得て、震災1週間後、アメリカから横田基地、仙台空港を経て、仙台市内の倉庫に93トンの物資が運ばれてきた。物資は、生活用品キット(タオル・石鹸・歯ブラシ・シャンプー等)、毛布、バケツ、ブルーシートなど。最初、どこに運べばいいのか、あちこちの災害対策本部に問い合わせたが、避難所に運ばれると、数が足りなければ不平等に

なるということが必要な物資が倉庫に積まれたままになっていることがわかった。たとえば、おにぎりが人数に1個足りなければ、誰かが分ければすむことだが、そういう融通ができない。これではだめだとスタッフとチームを作り、必要なところへ個別に届けることを始めた。ハワイからリュックひとつでやってきたマイケル・アンドリュースさんという人が大活躍した。まったくの個人で、世界のどこかで災害があると、すぐに駆けつけて一定期間、支援活動をして帰るのだそう。危機対応の国際NGOは知っているが、世の中にはそんな人もいるのだと初めて知った。

被災者のニーズと支援団体の供給のアンバランス、ミスマッチがニュースで何度も取り上げられたが、今回のような大震災では、自治体の対策本部でさえ機能していなかった。実際、庁舎が流された自治体もあったし、支援物資の仕分け、配達までとても手が回らない状態だった。支援物資が体育館に山積みされ、被災者に配布されない。配布する体制がやっと整っても、ニーズが変わっている。そんな中で、武浪さんたちは被災地を回り、直接、被災者のニーズを確認し、メールなどで倉庫と連絡をとりながら迅速に物資を届けるシステムを構築した。今回の支援にはスピードと情報共有が致命的だったと感じたそう。支援チームに女性がいるのも大事だと感じた。女性である被災者のニーズを聞き出すには女性が必要だった。

現在は、直接的な支援は少なくなり、被害を受けた幼稚園や保育園に教具を寄付したりしている。夏休みには、陸前高田で4~500人の炊き出しや、気仙沼の小学生8

0人を幼稚園に招待し、学園の小学生80人とペアを組ませてキャンプした。水遊びは津波を思い出すから良くないと言う人もあったが、子どもたちは園庭のプールで大はしゃぎだった。学園には卒園児を対象にした英語教室があり、今回、キャンプに参加したのは英語に来ている卒園児たちだそう。ペアリングを通じて、家からタオルケットを持って来るなど子どもたちも互いに思いやることを学んでいた。小学校卒業後、夏休みに3週間のアメリカ旅行、高校2年時には3週間のヨーロッパ旅行があって、武浪さんも間もなく引率でヨーロッパに出かけるころだという。

45年の歴史を経て地域に根差した教育機関の機能がよく見えて興味深かった。アメリカでは教会がコミュニティセンターとしての役割を果たすが、ここでは幼稚園がその代わりを果たしていた。親子とも卒園児ということもあるそうで、さまざまな社会的背景を持つ校友が密に関わり合っていたからこそ、緊急時のさまざまなネットワークが可能となった。行政自体が甚大な被害を受けて機能不全になっている時、機能の残っているところが中心になって小回りのきく支援活動を展開するというのは、きわめて現実的である。緊急時には親子も教職員も一緒になって地域に貢献しながら、時間経過とともに、少しずつ自分たちの日常性を取り戻しつつあるのもいいなと感じた。

9月21日 遠野

仙台にもう1泊し、翌朝、遠野へ移動する。11月のプロジェクトの詳細を詰めるためだ。立命館学園の復興支援室を通じて、とりあえず会場の確保だけはできていたが、協働してもらえそうなところがまだ見つかっていなかった。真っ先に訪ねたのは、遠野まごころネット(<http://tonomagokoro.net>)。ここは、東日本大震災で被災した岩手県沿岸部の被災者支援のために結成されたボランティア団体で、複数の筋からその活躍ぶりを耳にしていた。遠野は、盛岡、花巻、一関などの内陸部と、宮古、山田、大槌、釜石、大船渡、陸前高田などの沿岸部の中間に位置し、昔から内陸と沿岸を結ぶハブとして機能し、災害があれば後方支援をするという文化的土壌があった。ライフラインや商店も通常どおりで、沿岸部各地まで日帰りが可能であるため、遠野の人たちが立ち上がり、全国のボランティアを受け入れる中継地となっていた。

7月にここでボランティアをした友人によれば、毎晩7時に誰でも参加可能な会議があって、その場で受容と供給のマッチングができれば、すぐ活動できる仕組みになっているらしい。とても民主的な団体で、上下関係がほとんどなく、誰が何をやってもよい。全国からボランティアが入れ替り立ち替わりやってきて、2週間もいれば長期ボランティア、3ヶ月だと完全に内部スタッフとして、どんどん大事な任務を任せられ、経験の浅い若い子たちも大事なプロジェクトのリーダーを複数やっているという。そういうわけで、人に聞いても、ウェブサイトをチェックしても、いったい組織としてどうなっていて、誰に会って話をすればよいのかよく見えない。とにかく行っ

てみるしかない、前夜に電話を入れ、責任者という人にアポを取ったが、約束の時間に訪ねてみると、そこにいた人たちは、約束した人の名前を誰も知らなかった。

結局、その時、その場のリーダー的な人が応対してくれる。まごころネットは、ほとんどの場合、個人のボランティアが単発でさまざまなところからやってきて成り立っている。この方は7月から滞在し、長期の方。こちらの趣旨を伝えると、「マッチングをするので、心のケアとか何とか、ピンポイントで要望を言ってもらえないと応えようがない、先の約束は何もできない」とのことだった。なるほど。よくよく理解したことは、半年経ってもここはまだ危機状況にあるのだということ。関西から出発して、東京、仙台と北上するにつれ緊迫感が増してはいたが、私自身はまだ沿岸部を見ていないので、あらためて相当な温度差があることを実感した。2週間で長期ボランティアと見なされるということは、1週間先のこともわからないということだ。いや、1週間先どころか、前日のアポさえ消えてしまうのだ。とても10年先の話を持ち掛けるような状況ではない。

インフラと人手があって後方支援をし、ある程度、時間経過を経た遠野でプロジェクトをやるのはよいのではないかと考えていたが、遠野に来ている人たちは、みな、毎日、沿岸部へ出ているので、まだまだ危機状態と闘っているような状態なのだ。「ピンポイントの要望でないと応えようがない」という意味もよくわかった。ここで行われていることは、ボランティアがやりたいことをピンポイントで自己申告し、それを受けたいところがあればマッチングが成

り立つという原理で動いている。ある意味では、品質保証まで責任は持たれない。ゲリラ的と言うのか、この臨機応変さと機動力ゆえに、ここはこれほど活気にあふれ、全国のボランティアを鼓舞し続けているのだ。

とにかく遠野に共催するような余力はないと思うが、広報の協力はできる。遠野の仮設 40 軒については放置しておいていいのかという声が上がりはじめているとのこと、趣旨に合わないと思うがと紹介してくれた「NPO 遠野山・里・暮らしネットワーク」(<http://www.tonotv.com/members/yamasonet/>)をその足で訪問し、コーディネーターの方と話してみる。子育て関係ではあるが、里山など環境のことが中心なので、少し違うとは思いますが、良い活動だと思うので、代表に話してみる、広報の協力は OK と言ってもらう。

次に、遠野市図書館・博物館へ。会場の手配などはできるが、現在、みな被災地の文化救出活動に出ているため人手を出すのは難しい。遠野ゆかりの作家企画などだと図書館・博物館ともに関わりやすいが、現状では無理だと思う。図書館の利用者は親子と高齢者男性が多く、博物館は観光客が多い。市民ギャラリーは親子のほか、高齢者のサークル活動によく使われている。広報協力はできるが、予定の 11 月 1 日に間に合わそうと思うと 10 月号に載せる必要があるので今週末が締め切りになるとのこと。間に合うようにチラシを準備することにす。

最後は、遠野市子育て総合支援センターを訪ね、子育て総合支援室主任、立花正行さんと話す。今回、協力できるのは広報の

み。民生委員、保育士協会などとは関係しているが、児童相談所はなく、ファミリーサポート事業もない。遠野の子育て支援に今必要なのは制度である。後方支援ということで被災者にこだわらないのであれば、自分たちの家族を置いて遠野にボランティアに来ている人達の支援は必要かもしれない。ニーズ調査が必要だろう。遠野の行政と組んでやりたいのであれば、もっと時間をかけて一緒に相談してやっていくべき。立命館の思いをもっと聞きたかったと言われた。もっともである。

結局のところ、半年経った遠野でも、まだ沿岸部への直接支援で手いっぱい状態で、一緒にイベントをやりたいという状況ではないことがわかった。今年は、遠野で場所を借り、広報の協力してもらって自力でプロジェクトを行い、来年度につなげることにしようと決める。慌ただしい一日を終え、最大級の警戒が必要とされていた台風 15 号が接近するなか、列車と路線バスを乗り継ぎ、真っ暗になってから大沢温泉に辿りつく。大沢温泉の自炊部は震災後、たくさんの避難者を受け入れたそうだ。なかなかおつな支援ではないか。お風呂に入ってぐっすり眠っている間に台風は通り過ぎて行き、すがすがしい朝を迎える。この夜、実は、遠野が台風で大変なことになっていたようだ。

花巻、盛岡を經由して、はるばるむつまでたどり着く。三沢経由で京都からやってきた他のプロジェクトチームと合流するが、彼らは原燃 PR センターや東通村を見てきたとのことだった。いよいよ下北に来た。